Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-09-25

東南アジアのバックパッカー・エリアに関する研究

森，聖太

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2008-03-25
(Date of Publication)
2012-02-29
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4280
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004280

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	森　聖太
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学　位　記　番　号	博い第 725 号
学位授与の　要　件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の　日　付	平成 20 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

東南アジアのバックパッカー・エリアに関する研究

審　査　委　員

主　査　　教　授　平山　洋介
　　教　授　青木　　務
　　教　授　城　　仁士
　　教　授　市橋　秀樹
　　教　授　浅野　慎一

（別紙様式３）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　名　　森　聖太
専　攻　　人間形成科学専攻
指導教員氏名　　平山　洋介

論文題目　　東南アジアのバックパッカー･エリアに関する研究

論文要旨

第１章　研究の目的と方法

本研究は、東南アジアにおけるバックパッカー・エリアの空間形成の構造を明らかにすることを通して、観光と街づくりの関係のあり方を検討しようとするものである。観光がグローバルに拡大し、人びとの移動の増加が確実視される今日、大量の外部者の訪問が場所にもたらす影響と、その場所の既存の空間的・社会的・経済的文脈を調和させた街づくりのあり方をどのように構想すればよいのか、という問題が重要性を増している。本研究はこの問題に対して新たな知見をもたらすことを目的としている。

バックパッカーは、長い旅行期間、旅行計画の自己決定、少ない旅費、旅先で出会う人びととの交流の多さなどを主な特徴とする。ここでは、外国人バックパッカーが集まり、彼らを主要な顧客とする低料金の宿泊施設が密集した地区をバックパッカー・エリアと定義している。バックパッカー・エリアは、①バックパッカーは高級ホテルや特別な施設を必要としないことから、既存建築を活用した観光振興を進めやすい、②資本力の低い人びとにも観光関連の事業の開始が容易であるうえに、旅行者の消費行動が地元民の収入増加に直結しやすい、③外国人旅行者と地元民の文化交流が活発である、などの空間的・経済的・社会的特徴をもち、その意味で観光に関連した街づくりの１つのモデルを示している。

観光のグローバル化と街づくりの関係を考えるにあたっては、２つの論点を踏まえておく必要がある。第一に、グローバリゼーションが場所に与える影響に関する論点である。これについては、グローバリゼーションが場所の均質化を進めることが議論されてきた。しかし、グローバリゼーション下で生じる変容は、場所の空間・社会・経済的文脈と無関係ではありえず、場所ごとに異なった形で現れる。つまり、グローバリゼーションは多くの場所に影響を与えるが、その結果として、むしろ場所間の新しい差異を生むものとして考える必要がある。第二に、街づくりのあり方に関する論点がある。一方では、空間の大

幅な改造にもとづいて街づくりを進める方向性がみられ、他方では、ある特定の文脈の保存を前提とした街づくりの方向性がある。しかし、前者は場所の空間・経済・社会を激変させるおそれがあり、後者によって生まれた空間は時代の変化に対する柔軟性をもたない点において脆弱である。大規模な空間開発ではなく、また人為的な保存でもなく、場所の文脈を尊重したうえで、小規模な変化を積み重ねる方法の可能性を探ることが重要である。

これらの論点における位置づけを踏まえ、本研究は以下２点の方法を採っている。１つ目に、バックパッカー・エリアの空間・社会・経済の各次元において、外部者の訪問と、彼らを受け入れる場所の相互作用に着目するところから、観光に関連した街づくりのあり方を考えていく。観光と場所は相互に影響を与え合う関係にあり、どちらか一方に着目するだけでは不十分である。２つ目の方法として、バックパッカー・エリアの街づくりを観察するにあたって、そこに関わる主体を幅広く抽出し、その相互関係を分析していく。観光地の街づくりには多くの主体が関わっているのであり、特定の主体からの一方向的な視角に立つのではなく、幅広い主体の相関を分析することが有効な方法となりうる。具体的な調査手法の特徴としては、形成条件の異なる２つのバックパッカー・エリアでケーススタディを実施し、両者の比較をおこなう点があげられる。

観光と街づくりに関する既往研究として、大規模な開発、または場所の文脈の保存を前提とした街づくりのあり方を検討する多くの研究がおこなわれてきた。また、観光客、行政、住民など、特定の主体に着目した多くの研究が進められてきた。これに対して、本研究は、①場所の変化は不可避であるが、同時に、変化を場所の文脈に沿ってより良い方向に導くことが重要であるという考えにもとづき、観光の拡大がもたらす影響と、場所の文脈の相互関係に着目し、それと合わせて、②バックパッカー・エリアの街づくりに関わる幅広い主体に注目し、それらの相互関係を観察していく。

第２章　国際観光の拡大と重層化

ここでは、バックパッカー観光が世界に広まり、各地の場所に影響を与える様子を明らかにするために、国際観光の拡大と重層化の実態を分析していく。観光の類型のうち「高級・大規模観光」と「低廉・小規模観光」という２つに着目し、各々が地球上に広がるパターンを把握した。前者については、ホテルグループによる高級ホテルの立地の変化、後者に関しては、観光ガイドブック『地球の歩き方』が情報を掲載する場所の変遷を分析し、その結果、①高級・大規模観光は、大都市、有名観光地など、特定の場所に集中する傾向があり、②低廉・小規模観光は、辺境を目指して新しい場所へ次々と移動し、地球上に分散していくことがわかった。バックパッキング旅行に代表される低廉・小規模観光は、高級・大規模観光に比べ「広く薄く」広まることから、場所の空間・社会・経済に与えるインパクトが小さく、その意味において場所の文脈と整合しやすいといえる。

第３章　バンコク・カオサンエリアの空間形成

「都市・伝統バックパッカー・エリア」としての位置づけをもつ、バンコク中心部、カオサンエリアの空間形成の構造を分析した。現地において、①建築物と商業活動の内容とその変化、②観光関連事業従事者と外国人バックパッカーの特性、③空間開発に関する言説の内容、の３項目について調査を実施した。

①カオサンエリアの商業活動

現地の建築物は、「低層独立建築」、「中層独立建築」、「ショップハウス」という３つの類型に大別できる。「低層独立建築」と「ショップハウス」はバックパッカー・エリアの形成以前から建っていたものが多く、「中層独立建築」は宿泊施設などに用途を特化して新設されたものが多い。３つの類型の建築物は、観光関連の店舗・サービス施設を収容する空間としてそれぞれ利用され、現地の重要な空間構成要素となっている。当該エリアでは、異なる特徴をもった建築物が互いを淘汰することなく混在することによって、多彩な商業活動を成立させている。

②カオサンエリアの人びと

観光関連事業従事者は、現地または近隣に暮らしていた単純労働者が、親族等の紹介により現在の仕事に携わったという経緯をもつ「古参・地元縁故型」と、観光業の経験者が事業拡大の機会を見出し、現地の商業活動に近年参入してきたというパターンの「新参・経営指向型」に大別できる。現地の外国人バックパッカーは、日々の消費額が小さく、旅行期間が長く、柔軟に行程を変更し、職をもたないなどの特徴を有する「漂泊型」と、消費額が大きく、旅行期間が短く、厳密な計画に沿って旅行し、何らかの職に就いている、などの特徴をもつ「予定型」の２種類に類型化できる。対照的な性格をもった人びとが集まって、カオサンエリアの社会を形成している。

③現地の空間開発に関する言説の内容

当該エリアの空間開発計画をめぐって多彩な主体が発する言説は、現地の空間の大幅な改編を支持するものと、場所の文脈の保存を主張するものに大別される。現地の空間像に関する人びとの意見は１つの方向性に収斂しない。

以上の結果から、現地では、多様な建築物の混在のもとで幅広い種類の商業活動が展開され、そこに対照的な性質をもつ人びとが集まることで、重層的な空間が形成されていることがわかった。重層的なカオサンエリアの空間は、特定の意見のもとに収斂されることなく、多彩な構成要素を受け入れる柔軟性を保持している。その柔軟性こそが現地の魅力を生み出してきた。

第４章　ラオス・ヴァンヴィエンの空間形成

次に、「農村・新興バックパッカー・エリア」として、ラオス・ヴァンヴィエン中心部における空間形成の構造を分析した。①建築物と商業活動の内容とその変化、②同エリアに立地する宿泊施設所有者と外国人バックパッカーの特性について、それぞれ調査を実施した。

①ヴァンヴィエンの建築物と商業活動

現地の建築物は、地元民の住宅をはじめとして、観光の振興以前から立っていた小規模建築が大半を占める。バックパッカーを主な顧客とした商業活動は、これら既存の小規模建築を柔軟に利用することで展開している。近年、現地では１階建ての小規模建物と、観光関連の店舗が増加している。ヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアは、既存の小規模建築を利用した小規模な観光関連ビジネスが集積して形成されてきた。

②ヴァンヴィエンの人びと

宿泊施設所有者は、その大半が古くから現地に暮らす人びとであり、小規模な宿泊施設を家族で運営するなど、「古参・地元縁故型」が多い。近年では、少数ながら「新参・経営指向型」の個人による宿泊施設が増加傾向にある。小規模建築が集まったヴァンヴィエンでは、資本力の低い人びとにとっても、小規模な観光関連ビジネスを開始することが容易である。現地を訪れたバックパッカーには「漂泊型」が多い。彼らは、旅行計画の柔軟性が高いこと、旅行期間が長いこと、平均５日以上現地に滞在すること、「ラオスの農村らしさが残っていること」「観光地としての未開性」に現地の魅力を感じていることなどの特徴をもつ。小規模な建築と商業活動の集積した空間がバックパッカーを呼び寄せている。同時に、バックパッカーは現地に長期間滞在し、地元民が経営する宿泊施設や店舗を積極的に利用することで、こうした小規模な商業活動を成立させている。

以上の調査結果から、①ヴァンヴィエンでは、バックパッカーによる観光を受け入れたがゆえに、現地の文脈を激変させることなく、地元民の経済振興と人びとの文化交流が促進される場所が形成されていること、②今後の農村の街づくりにおいては、多くの資本を投下して大規模な開発をおこなうだけではなく、バックパッカー観光を取り入れることが、より合理的な選択となりうること、がわかった。

第５章　結論

最後に、本研究の結論として、２つのバックパッカー・エリアの共通点と相違点を整理し、それを踏まえて観光と街づくりに関する考察をおこなった。

第一に、２つのバックパッカー・エリアに共通するのは、その空間が小規模な変化を積み重ねることで形成されてきたという点である。バックパッカー・エリアでは、その場所の文脈と外部からの訪問者が調和的な関係を形づくると同時に、小規模な変化の積み重ねによって街づくりが進行してきた。外部者の訪問と場所の空間的・経済的・社会的文脈の接触から生まれたバックパッカー・エリアは、人びとの文化交流、あるいは地元民の経済振興が促進されるなど、より多くの人びとが利益を得られる場所を形成している。今後の観光に関連した街づくりに取り組むにあたっては、大規模開発を進めるだけではなく、また人為的な保存を施すだけでもなく、場所の文脈を重視したうえで、小規模な変化を柔軟に積み重ねるという方法を有効な選択肢として追求していく必要がある。

第二に、２つのエリアの相違点として、空間の「多様性」があげられる。カオサンエリ

アでは、さまざまな類型の建物・商業活動・人びとが混在し、それらを受け入れる空間の柔軟性が魅力を形成していたのに対し、ヴァンヴィエンでは、均質な建物と人びとが「ラオスの農村らしい」空間を形成することで旅行者を引き付けていた。ここで注意すべきは、均質な空間がもつ、変化に対する脆弱性である。ヴァンヴィエンでは、空間・社会・経済が「ラオスの農村らしい」要素で構成されている限りにおいて、現地の魅力が維持されている。しかし、均質性に根ざした場所の魅力は、異質の建築物や人びとの出現によって容易に損なわれるという意味において、変化に対して弱い。このことを、今日各地で取り組まれている、観光に関連した街づくりに敷衍して言えば、大規模開発にしろ、保存にしろ、一定の方向性のもとでの空間づくりは、変化に対する柔軟性を縮減させる可能性がある。将来の街づくりのあり方を構想するにあたって、特定の方向に収斂した均質な空間がもつ魅力をどのように考えるのか、あるいは、観光地をつくり出すという行為がどういった意味をもつのか、についてのさらなる検討が求められる。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	森　聖太		
論文題目	東南アジアのバックパッカー・エリアに関する研究		
判　　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教　授	平　山　洋　介
	副　査	教　授	青　木　務
	副　査	教　授	城　仁　士
	副　査	教　授	市　橋　秀　樹
	副　査	教　授	浅　野　慎　一

要　　旨

本審査委員会は平成20年2月22日に論文審査を行い、次のような審査結果を得た。本論文は、東南アジアにおけるバックパッカー・エリアの空間形成の構造を明らかにすることを通して、観光と街づくりの関係のあり方を検討しようとしたものである。

観光がグローバルに拡大し、人びとの移動の増加が確実視される今日、大量の外部者の訪問が場所にもたらす影響と、その場所の空間的・社会的・経済的文脈を調和させた街づくりのあり方を構想する必要が高まっている。これに関して、一方では、空間の大規模な改造にもとづいて観光開発を進める方向性がみられ、他方では、場所の固有性の保存を前提とした街づくりの方向性がある。しかし、前者は地域の空間・経済・社会を激変させる危険性をもち、後者によって生まれた空間は時代の変化に対応する柔軟性を有していない。大規模な開発ではなく、また凍結的な保存でもなく、場所の文脈を尊重したうえで、小規模な変化を積み重ねる方法の可能性を探ることが重要である。

このように問題を立てるとき、バックパッカー・エリアは、①バックパッカーは高級ホテルや特別な施設を必要としないことから、既存建築を活用した観光振興を進めやすい、②資本力の低い人びとにも観光関連の事業の開始が容易であるうえに、旅行者の消費行動が地元民の収入増加に直結しやすい、③外国人旅行者と地元民の文化交流が活発である、などの空間的・経済的・社会的特徴をもち、観光に関連した街づくりの１つのモデルを示唆するものである。

本論文は、以上のような立論にもとづき、全５章から構成される。第１章は研究全体の枠組み、及び先行研究と本研究の位置関係を示したものである。第２章は国際観光の拡大と重層化の実態を分析し、高級・大規模観光が大都市、有名観光地など、特定の場所に集中する傾向をもつのに対し、低廉・小規模観光は、新しい場所に向かって移動し続け、地球上に分散していくことを明らかにしている。バックパッキング旅行に代表される低廉・小規模観光は、高級・大規模観光に比べて「広く薄く」広まることから、場所の空間・社会・経済に与えるインパクトが小さく、場所の文脈と整合しやすいといえる。この点は、本論文の対象であるバックパッカー・エリアの位置づけを明快にするものである。

第３章と第４章はバックパッカー・エリアに関するケーススタディの結果を論じたもので、本論文の中核を構成する。第３章は「都市・伝統バックパッカー・エリア」であるバンコク中心部・カオサンエリア、第４章は「農村・新興バックパッカー・エリア」としてのラオス・ヴァンヴィエン中心部を対象とし、①建築物・街路等の物的環境、②宿泊所経営・小売り等の商業活動、③観光関連事業従事者の特性、④外国人バックパッカーの特性に関して、継続的な現地調査を踏まえた分析を加えている。カオサンエリアでは多種の建築物の混在が重層的な商業活動と社会関係を誘発すること、ヴァンヴィエンではバックパッカーによる観光を受け入れたがゆえに、現地の文脈が激変することなく、地元住民の経済振興と文化交流が活性化していること、等を示す分析結果は、街づくりのモデルとしてのバックパッカー・エリアの位置づけと意義を実証的かつ説得的に論証したものとなっている。

第５章の結論は、ケーススタディから得られた知見をもとに、場所の文脈を重視し、かつ小規模な変化を柔軟に積み重ねる、という街づくりの方法の有効性を提示すると同時に、場所の均質性に根ざした街づくりを進めるヴァンヴィエンでは環境の激変が生じる可能性を否定できないこと、カオサンエリアにみられるような場所の多様性にもとづく街づくりは漸進的な変化を重ねていけることを論じている。この結論は、空間・社会・経済の次元における場所の多様性を持続することの重要性を示したものである。

本審査委員会は、本論文を慎重に審査した結果、本研究はバックパッカー・エリアの動態を継続的かつ入念なフィールドワークによって実証的に明らかにするとともに、それを通じて観光関連の街づくりのあり方に関して新しいモデルを示唆した点において価値ある業績であると認める。

なお、以下２編の審査付き学術論文に加え、２編の国際学会プロシーディングス、２編の学術報告などがすでに発表されている。

（１）森聖太・平山洋介「バックパッカー・プレイスの空間構成とその変容　バンコク，カオサンエリアのケーススタディ」『日本建築学会計画系論文集』第586号、pp.127–133、2004年12月

（２）森聖太・平山洋介「ラオス・ヴァンヴィエンにおけるバックパッカー・エリアの空間構成とその特性」『日本建築学会計画系論文集』第619号、pp.77–83、2007年９月

よって、学位申請者の森聖太は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。